教祖百四十年祭

真明

発行所
天理教芦津大教会
〒546－0003
大阪市東住吉区
今川8丁目6番32号
電話　06（6702）1980
FAX　06（6700）1854
Eメール　shinmei@ashitsu.or.jp
印刷所　天理時報社

動くからこそ

こどもおぢばがえりの「三つの約束」について説明を受ける子供たち

9月は「全教会布教推進月間」として、全ての教会が一手一つににをいがけ実動に励む期間です。大教会では、各教会の月次祭後に実動することと、1人のようぼくが3枚のリーフレット配布を行うことを実動目標として打ち出しています。

インターホンを押すのが怖い。教えを間違いなく伝える自信がない。にをいがけで最初の一歩を踏み出す前は、誰しもが不安を抱えます。実動しても、なかなか話を聞いてくれないことも多いでしょう。しかし、人だすけの心で動くからこそ、自らの心を見つめ直し、「いかにして教祖にお喜びいただくか」をより一層深く考えることができる。にをいがけに限らず、動く中で自分の心が磨かれ、人をたすける心が大きくなり、「人救けたら我が身救かる」御守護を頂戴するのです。

教祖年祭の旬、持ち場、立場は違えども、すべてのようぼくが心一つに人だすけに励むことを、教祖はお望みになっておられます。私たちの使命は「信仰の喜び」を人様に伝えること。自分が神様にたすけられたこと、神様の御守護を実感したことを、精いっぱい真剣に伝えさせていただきましょう。

「あんたの救かったことを、人さんに真剣に話（はなし）さして頂くのやで。」

逸話篇100「人を救けるのやで」

四方正面

今年秋季大祭の10月をもって修養科は1000期を迎える。

修養科は遡れば昭和16年4月から教校別科に代わって始まった。少し説明を加えれば、前身の別科は一期6カ月で、全員刺繍（ししゅう）のない黒の教服を着用していたと聞く。別科は、今の真南通りを南に進んで南棟を越え、当時は右手に見えた小高い丘の鑵子（かんす）山にあった。多い時は別科生6期合わせて1万人いたとも聞いた。鑵子山のカラスと言われた所以であろう。

筆者の入った第409期は、教祖九十年祭の前年夏前。410期にいた、ある大教会長氏が数えたところ、「前後期合わせて6千人いた」と後日語っていた。朝礼時4棟前広場は修養科生で溢れた。今も思う、修養科はたすかる場であり、たすける場でもある。年祭なれば、なおさらと信じる。

さあ1000期が待っている。

（眞）

《7月月次祭　挨拶》

1000期を吉祥に 修養科生の一層の丹精を

大教会長　井筒梅夫

皆さん方には、年祭活動の時旬の御用の上に、精いっぱいご丹精くださいまして、誠にご苦労様です。また、暑さ厳しい中を大教会にご参拝いただきまして、只今は7月の月次祭を勇んで勤めさせていただき、大変ありがたい次第です。

さて、昭和16年に開設されました修養科が、今年10月で1000期を迎えることになりました。修養科の前身は天理教校別科で、半年間をおぢばで伏せ込み、仕込みを受けられた先人たちの多くは、別科終了後、各地へ布教に赴き、教勢の進展に大いに寄与してくださいました。そんな中、宗教法人法が施行されたことから、天理教教規の変更とともに別科は廃止され、新たに専修科、予科、修養科が開設されたのです。

修養科は、親里ぢばで教祖の教えを学びながら心の修養に励み、信仰の喜びを体得するための修練道場です。さらには、おつとめを習得し、おさづけの理を拝戴し、人をたすける心を養って、ようぼくとして生まれ変わる、成人の道場でもあります。

この修養科の開設から83年間で、芦津からも大勢の方が修養科に伏せ込み、3カ月間で親神様の限りなく大きな御守護を悟り、これまでの暗い不足の心を明るい感謝と喜びの心に入れ替えて、御恩報じの実行へと成人を進め、教会の上に一生懸命に勤めてくださっています。本当におぢばはありがたい、修養科はありがたいと大いに感じるところです。

詰所は、信者室棟と隔てた別棟に修養科棟を設けて、特別に教養体制を整えています。旧詰所は、正面に2階建ての大きな本館が出迎えてくれます。その右側になだらかなスロープがあって、それを上がると地上2階、地下1階の大きな建物が建っており、1階と2階部分が宿泊場所で、地下には食堂と厨房、そして修練室などが置かれていました。この信者棟と中庭を挟んだ南側に建っていた2階建ての建物が修養科棟でした。当時、信者棟、修養科棟と呼んでいたのか、詳しくは分かりませんが、やはり信者室とは棟を分けて、特別に修養体制を設けていました。つまり、今の詰所の修養科棟は、旧詰所から引き継いでいるのです。これは修養科が信仰者としての成人に欠かせない3カ月であり、心を込めて丹精をさせていただこうという、修養科開設以来の大教会の姿勢が形となっているのです。

先月のかなめ会において、「修養科1000期を迎えるのを吉祥に、修養科の募集に力を入れていただきたい。1000期となる10月期だけに拘らずに、年祭活動期間中に修養科生を大勢送り出していただきたい」との発表がありました。

今回の年祭活動は、それぞれの教会が三年千日の目標を立てて、心を定めて勤めるという方針が本部から出されましたが、そうした最中にあって、全教に対しての特例的な声掛けがあったわけです。私は、ここに旬の理の働きを感じます。この旬にたすけてやろう、成人させてやろうと教祖が親心を掛けてくださっているよ

うに思います。この本部の声に芦津もしっかりとお応えをさせていただきたいと思います。

これからの陽気ぐらしへの道の歩みを思案すれば、ようぼくはたすけ一条のお役に立ち、教会内容充実の一員とならねばなりません。そのような成人をするには、修養科は実に大切な機会になるのです。皆さんの周囲の方々の中には、身上や事情の悩みを持つ方もおられると思います。人生の転機に立って、真に生きる道を求めておられる方も、ただ何となく日々を過ごし、進む道を迷っている方も、信仰者としての成人を求めている方もおられるでしょう。「この人には、もう少し成人してもらいたい」と考えている方もおられると思います。そうした方々に声を掛けて、積極的に修養科を勧めていただきたい。必ずおぢばでたすけていただける、修養科で成人させていただけるとの信念を持って、修養科生の丹精に取り組ませていただきたいと思います。

◇　◇　◇

さて、7月27日から8月4日にかけて、親里で「こどもおぢばがえり」が開催され、その後には「学生生徒修養会・高校の部」が行われます。私たち先に道を歩む者は、これからの道を背負う世代を導き育てる役目と責任を持っています。さまざまな育成活動を活用して、末代の道を目指して、信仰の喜びを繋ぎ伝えていく努力を、諦めることなく重ねていきたいと思います。

今年の夏は大変暑い日が続くようです。暑さが身に堪えて体が疲労するのは自然の理（ことわり）ですが、気持ちは元気に保って、この夏を乗り越えて、収穫の秋に備え臨ませていただきたいと存じます。

（要約）

立教百八十七年　七月月次祭祭文

これの神床にお鎮まり下さいます親神天理王命の御前に、天理教芦津大教会長井筒梅夫、慎んで申し上げます。

親神様には一れつ子供可愛い一筋の親心から、数々の御恵みをお垂れ給い、日夜絶え間なき御守護にお見守り下さいまして、成人の道をお連れ通り下さいます御慈愛の程は、誠に有難き極みでございます。私共は、日々賜ります御守護にお礼を申し上げ、御恩報じの思いで時旬の道に励ませて頂いておりますが、その中にも今日のこの日は、おぢばより当大教会にお許しを頂きました月に一度の芽出度き日柄でございますので、只今から、役目にあずかる者一同心を揃え、座りづとめ、陽気てをどりを勇んで勤めて、七月の月次祭を執り行わせて頂きます。御前には、身に余る御恩に御礼申し上げたいと参らせて頂きました芦津の道の子達が、共におうたを唱和して、つとめの理に心を結ぶ真実の状を御照覧下さいまして、親神様にもお勇み下さいますようお願い申し上げます。

さて、この月の二十七日から来月四日まで、立教百八十七年こどもおぢばがえりが、その後引き続いて学生生徒修養会・高校の部が開催され、夏のおぢばを楽しみに、各地から、大勢の子供達や学生達が親里へ帰らせて頂きます。皆が一つ心に親しみを交わし、様々な行事や活動を通して御教えに触れながら共に喜びと感謝の心を育む状を、温かき親心でお見守り下さいまして、期間中、無事滞りなく運ばせて頂き、をやの御恵みに浴した道の子供達が、これから先いき〳〵と心豊かに成長し、信仰者として成人させて頂けますようお導きの程をお願い申し上げます。

私共をはじめ、芦津に繋がる教会長、ようぼくは「水を飲めば水の味がする」と、どんな中でも大いなる御守護を忘れず報恩に努め、節から芽が出る旬を逃さず、おたすけと丹精に真実を尽くして、教祖百四十年祭を目指してたすけ一条の道を一段と勇んで歩ませて頂く決心でございます。

何卒、一同の決心と旬に励む真心の状をお受け取り下さいまして、道の御用に馳せ回る教会長、ようぼくの上には、不思議自由の理にお導き下され、時旬に相応しいたすけの実を御守護下さいまして、節から大きく芽が出る道へとお連れ通り下さいますよう、一同と共に慎んでお願い申し上げます。

《7月月次祭神殿講話》

陽気ぐらしは親の思いを悟り 教えを実践することから

役員　山本義範

「諭達第四号」に、「**この五十年にわたるひながたこそ、陽気ぐらしへと進むただ一条の道である」「陽気ぐらしの生き方が今こそ求められている**」とあります。人間は誰しも、陽気ぐらしをするための元のいんねんをもっています。

人間の身体は、陽気ぐらしのために創られ、自分自身が喜ぶだけではなく、人と共に喜びを分かち合うための道具であり、人だすけの心で使わせていただくことが、大切なことではないでしょうか。

その使い方によって、人間関係は、良くもなれば悪くもなります。もし、自分の都合だけに使えば、人との摩擦は避けられず、トラブルも絶えません。一方、人をたすけ喜ばせるために使えば、人から好かれ、周りに人が集まります。良い人間関係が、陽気ぐらしの鍵となるでしょう。

親の思いを悟ること

陽気ぐらしをするために創られた私たち人間が、なぜ身上になって苦しまねばならないのでしょうか。

みかぐらうたの十下り目に、

やまひはつらいものなれど
もとをしりたるものハない
このたびまでハいちれつに
やまひのもとハしれなんだ
このたびあらはれた
やまひのもとハこゝろから

と教えられます。

病の元はそれぞれの心にあり、そこには親神様の深い思いが込められています。

みのうちにとのよな事をしたとても
やまいでわない月日ていりや
十四号　21

いかなるのやまいとゆうてないけれど
みにさわりつく神のよふむき
四号　25

また、私たちの心をつくり、陽気ぐらしに導くための「てびき」であり、世界を建て替えるふしんの用材とするための「ていれ」「用向き」だと聞かせていただきます。親神様はさまざまな出来事を通して、私たちを救いの道へと導いてくださいます。

随分と前のことですが、信者会館の竣工式の日に、当時3歳の三男が廊下に置いてあったカウンターの下敷きになり、おでこを26針縫う大けがをしました。幸いにも脳や骨に異常はなく、10日で抜糸して、大難は小難に御守護を頂きました。そして、この台が数センチ下にズレていれば、また誰もいないところでこの事故が起きたならばどうなっていたか、命のないところをおたすけいただいたんだと、心から喜ばせていただくことができました。

このとき、大教会長様より「繋ぐ」ということを夫婦でよく思案するようにと、お仕込みを頂戴しました。

この節をお見せいただく前にも、四男が家の階段から落ちたり、長男がラウンジのソファーで目の上を切るということがありました。神様の思いを少しずつお見せいただいているにもかかわらず、そこに親神様の思いを思案せず、今まで通りに通っていた矢先の大きな出来事だったのです。

逆に私にとって、この大きな節がなければ、親の思いも分からずに、心も繋いで通らせていただくことができないほど、残念な通り方をしていたのかもしれません。こうした節を通して、何事においても繋ぐことの大切さを厳しく教えていただいたのです。

皆様方も旬々に応じて、さまざまな経験をされていると思いますが、そこで、どれだけ親神様の御守護を御守護と感じ、教祖の親心であると思うかで変わってくるの

ではないでしょうか。

こうした節や身上を通して、私たちは親神様の御守護を心に刻み、神様におもたれする心を定め、新しい自分へと少しずつ生まれ変わっていきます。困難に負けない強い心、苦しむ人たちへの思いやりの心を養い、人として、ようぼくとして、ひと回りもふた回りも大きく成長します。「この者をぜひ世界たすけに使いたい」との親神様のやむにやまれぬ熱い思いを悟り、御恩報じを心に定め、実行していくことで、鮮やかに御守護いただけるものと信じます。

張り合いのある充実した人生を築けるかどうかは、燦々（さんさん）と降り注ぐ親神様の御守護に心から感謝をし、生かされている喜びを感じることが大切なことではないでしょうか。

幸せに近づくチャンス

誰しも「幸せになりたい」と願っていると思いますが、幸せや不幸せの鍵は、姿、形にあるのではなく、それぞれの心にあります。自分の周りで起こってくる思いもかけないような出来事や病気も、捉え方、受け止め方で、その物事を幸せに感じたり、不幸せに感じたりできるということです。

例えば、目が見える、耳が聞こえる、話ができることは「当たり前」のことかもしれませんが、そうではなく、ありがたいことなのです。

自分が「もし見えなかったら、もし聞こえなかったら、もし話せなかったら」と思えば「ああ、見えてありがたい。聞こえてありがたい。話せてありがたい」と思えるのではないでしょうか。

「ありがたい」という気持ちには喜びがついてきますが、「当たり前」という気持ちには喜びはついてきません。

親がいる、兄弟がいる、友達がいる、何一つあって当たり前ではないのです。失ってから気づいたのでは遅いのです。自分の周りにいる人や、ある物。自由に使える心で、今一度、あって当たり前ではなく、あるということに感謝して、喜びいっぱいの生き方をしたいものであります。その心をもって、日々何か御用の一つでもさせてもらうことが、この旬に相応しい成人の歩みだと思います。

ある先生から、「人に与える喜びは自分に返ってくる」と教えていただきました。

人の喜ぶ顔を見れば、一層人に温かく接することができ、生きることが楽しくなります。人のために何か手助けをすることは、回り回って自分をたすけてもらうことにもなると思うのです。

もし誰かのために何かができる場面に遭遇したのなら、それは幸福に近づくためのチャンスなのです。少し心の向きを変え、不自由な人の気持ちを思いやって、全力で動かない手はありません。この道を信仰するお互いにとって、人のために祈り、人の力になれるということが、本当の幸せに近づく道ではないでしょうか。

教えの実践

親神様を信じることが信仰の第一歩ですが、お互いに信じているつもりでも、なかなか信じ切ることは難しいものです。親神様を信じ切るには、親神様のお言葉を信じて実行することが大切だと思います

どんなに悲観、絶望のときでも、原典を読ませていただくと、親神様の力強いお言葉に触れて、心も安まり、新しい自信と勇気が湧いてきます。そこで親神様を信じ切ることができたら、親神様の限りない御恩や親心が、だんだんと心から分かってまいります。そして、それにお応えするには、親神様がお喜びくださる御恩報じをさせていただくことが大切になってきま

す。

教祖五十年のひながたの道は、親神様の教えを忠実に実践された手本ひながたです。中でも一番心に感じることは、20数年間、だれ一人聞いてくれない中を、教祖は、常に明るい希望と喜びをもって、陽気ぐらしの道を説かれたということです。

『みちのとも』に掲載されていたある先生のお話の中に、「教祖は毎月のように、この村に来て人々に話をしたが、だれも耳を貸さなかったそうです。裕福な家には入られずに、貧しい人々の家にしか入らなかった。村の人はみな教祖を狐つきと言っていたそうです」と、おぢば近辺での教祖のにをいがけの様子が出ておりました。

この短い伝承を読ませていただいて、改めて道すがらの実情を知り、にをいがけの真髄を教えていただいたように思います。

にをいがけとは、人が聞いてくれないと分かっていても、また笑われそしられても、心倒さず、あきらめずに、繰り返し繰り返し、親神様の教えを取り次いでいくことであり、欲も高慢も取り去って、心をどん底に落とすことです。貧のどん底もなかなか大変な道ですが、人には見えない心のどん底のほうがさらに難しいのではないでしょうか。

ひながたの前半の御苦労は、ただただこの道を伝える御苦労であったように思います。その御苦労のおかげで、今日では官憲の弾圧などのいばらの道はなくなり、安心して伝えることができるのです。

親神様への御恩報じは、自分にできるにをいがけ、おたすけをコツコツと真剣につとめることが大切であり、御恩報じの心と行動が、私たちの目指す陽気ぐらしに導く力になるのではないでしょうか。

いよいよ、教祖百四十年祭へ向かっての歩みも、折り返しに差しかかりました。お互い、心新たな歩みを進める中に、常に教祖ひながたの道に思いをいたし、心勇んで通らせていただきましょう。

（要旨）

七月月次祭　祭典役割

祭主	大教会長	扈者	岩切正教	扈者	山田道弘	座りづとめ	大教会長 今川政治 川畑澄博 会長夫人 前会長夫人 今川和子	てをどり	地方 湯川正圀 竹内義忠 加世田洋
指図方	井筒文夫	賛者	浜田宣郎	賛者	川畑正博	前半	岩切正義 梶川和隆 石川健郎 山田秀子 梶川りよ子 山埜こずえ		守田清一 河端芳雄 西本義之
献饌長	守田清一	伝供	川畑澄博 山本義範 加世田洋			後半	花岡忠和 今川聖一 宗我道明 岩切治代 山本広子 中村寿々代		河合善洋 西本興正 梶川和人

笛	瀧本庄司	琴	井筒ちぐさ	立花善三	望月慶太	瀧本美奈	梶川正美	河合ふみ子	水田秀秋
ちゃんぽん	奥田正德	三味線	中村美津代	吉田裕和	新居里実	梶川芳征	宗我道明	北村浩	齊藤洋
拍子木	岩切正教	胡弓	望月恵美	木村真次	湯川正信	望月慶太	梶川和人	北島久嗣	坂井清人
太鼓	瀧本眞二郎		竹内淳子	葭内浩	榎康紀	瀧本亘	榎康紀	湯川正信	新居里実
すりがね	山本義範		岩切孝子	立花善文	岡本久昭	中村俊和	岡本久昭	西本興正	村田光伸
小鼓	奥田眞治		梶川文子	立花善三	梶川芳征	加世田洋	瀧本庄司		

立教187年　こどもおぢばがえり
真夏のおぢばに笑顔が溢れる

7月27日から8月4日まで、おぢばで「こどもおぢばがえり」が開催された。

連日35度を超える猛暑日が続いたが、日本全国、また海外からも大勢帰参し、子供たちの笑顔と喜びで溢れた。

少年会芦津団（加世田洋団長）は、少年会本部の活動方針の中にある「子供とおぢばがえりの喜びを味わおう」「全教会からの帰参を目指そう」との打ち出しを受け、各教会に積極的な帰参を呼び掛けた。

期間中は、毎朝ラジオ体操を行い、18時15分からは、5階会議室で夕づとめ遥拝を勤めた後、芦津団独自の夜の行事を実施した。修養科修練場では、「あしつ広場」を開催。射的やボールプール、ジャンケンゲームなど、さまざまなミニゲームで少年会員を楽しませた。2階大広間では、今年もお化け屋敷を開催。会場内からは子供たちの悲鳴が響きわたった。

1階事務所前では、学生会がかき氷、ポップコーンの販売を行い、大勢の子供たちで賑わいをみせた。

また大教会長からのお土産として少年会員にうちわを配布した。

加世田団長は「今年も大勢の子供たちがおぢばに帰ってきてくださり、たくさんの笑顔を見ることができ、ありがたい」と話した。

芦津からは112隊、少年会員611名（内、わかぎ70名、初参加者142名）育成会員437名、合わせて1千48名が帰参した。

なお芦津鼓笛バンドは、8月2日の鼓笛オンパレードに出演し、39年連続の金賞を受賞した。

あしつファミリーひのきしん　育成部

7月21日、育成部（山田道弘部長）は、大教会で3回目の「あしつファミリーひのきしん」を開催。大教会の年祭活動の方針の一つである「ひのきしんと伏せ込み」を目的に、親子が揃って大教会に伏せ込み、旬の理づくりをさせていただこうと、午前の部に、大人19名、子供19名、午後の部に、大人7名、子供4名が参加した。

午前10時30分、お願いづとめ終了後、神殿で参拝。午前は、大教会南側の除草ひのきしん。炎天下の中、勇んでひのきしんに勤しんだ。

昼食、おやつ休憩後、午後からは1階の廊下拭きひのきしん。終始、和やかな雰囲気の中で、大勢の少年会員も家族と共に笑顔でひのきしんを行った。

関東地区芦津会開催

7月14日、東京教務支庁で「第31回関東地区芦津会」を開催した。参加者は27名。

最初に、鳴物を入れて全員で十二下りのまなびを勤めた後、「諭達第四号」を拝読。続いて会員同士によるおさづけの取り次ぎ。そして、篠田俊策さん（四ツ海）、中神直子さん（紀周）の感話があった。

次回は11月10日に開催予定。

教務部報

教養掛主任（6月、7月）
木村　真次（6月）
井筒　文夫（7月）

教養掛
湯川　正信・日樫　勝郎
仁尾　智教・望月　恵美

教人登録
岩切　寿代（島　原）
立教187年7月6日

教人資格講習会第143回修了
林　昌子（山城谷）
立教187年7月11日

修養科第995期修了
吉田　真也（今津原）
谷上　由樹（眞　一）
立教187年7月27日

ようぼく講習会修了
加世田みずほ（大　島）
関本　周平（紀　周）
立教187年7月7日

おさづけの理拝戴《6月》
上野有佳里（西　浜）
山本　和子（西　浜）
山本　毅（西　浜）
山田　政美（畦　川）
〈拝戴日順　4名〉

初席《6月》
〈3名〉直轄
〈1名〉島新、芦島鶴、日台、津阪
〈順序運びより　7名〉

おやさと練成会〈中国語コース〉
謝　翔宇（真明新營）
立教187年7月22日

■訃報■

宮江分教会七代会長（元・門司部属）
岩崎淑子氏（いわさきよしこ）

令和6年7月20日出直された。享年79歳。

告別式は7月24日、望月慶太・門司分教会長斎主のもと、白野江分教会（福岡県北九州市）で執り行われた。

氏は、昭和20年5月7日、父・岩崎静雄、夫代の子として生まれ、同38年西南女学院高等学校卒業、同43年おさづけの理拝戴、同46年修養科第364期修了、同55年教人登録、平成25年宮江分教会七代会長に就任。

尽くし運び、ひのきしん、にをいがけ、おたすけに精魂の限りを尽くされ、殊に、大教会をはじめ、上級教会への伏せ込みにおいては、たんのうの心を捧げ、道の先達として多くの人を導かれた。

月例統計（自令和6年1月1日～至令和6年6月30日）

項目 / 名称（）内教会数	初席	おさづけの理拝戴	修養科修了	教人
大教会（1）	8	7		
靱（13）	3			1
東津（23）	3	2		
吉野川（29）	8	1		
島原（16）	13	1		
日方（15）	6	4		
稗島（7）	3	1		
本津（2）		1		
日高（2）				
姶良（5）	1			
津和（12）	1	2		
門司（6）	3			
當別（6）				1
大島（26）	10	6		2
沖縄（3）	2			
尼崎（2）	1			
四ツ山（5）	1	1		
大冠（2）				
島下（1）				
天保山（3）				
青木（1）				
芦浪（1）	2			
甲邊（1）				
芦華（1）				
天津（1）				
入江（1）				
豊野（1）				
紀周（3）	7			
勝明（1）				
神の島（1）		1		
兵庫眞洲（1）	2			
芦ノ郷（2）	2			
本明勇（2）	1	1		
明道（1）	4			
芦東（1）				
和鎮（3）	3			
神滝本（1）				
芦明徳（1）				
真明彰化（2）	12	3		1
本氣（2）				
芦明照（1）				
真伯（1）				
合計（209）	96	31	0	5

青年会ひのきしん隊　家族入隊　9/16 祝

青年会員以外の方も参加できます！

集合・解散：8時20分詰所集合　16時解散予定

内容：境内地ひのきしん　参加御供：1人500円

服装：動きやすい服装（できれば長ズボン着用）

詳細は青年会芦津分会まで